

公開講演会要旨

石器づくりの技術 道具をつくることによって他の動物と区別される人類は 100 万年の歴史のなかで、石どうしを打ち合せて割る技術とともに、石より軟らかい骨角ハンマーを用いる技術、たがねによる技術、押し剥ぐ技術を編みだす。

二上山産サヌカイトを鹿角製ハンマーで打ち缺いて長さ18cm、幅6cm、厚さ1.2cmの薄身な槍を完成できた。軟質ハンマーのねばりが薄く、奥深く剥ぎとってくれるためである。

鹿角をたがねとして石を割る実験を試み、幅4.5cm、長さ18cmの石刃を得た。サヌカイトも石理にしたがえば縦長の剥片を剥ぐことができることを証明できた。横長の剥片を生ずるのがこの石材の特質とみたのは誤りである。押し剥ぐ技術では弥生時代の鏃に優れた製品があるが、硬く、施しにくい石材である。
(松沢亜生)

古代住居再現 近年の発掘で得られた遺構や遺物——特に建築部材——を直接資料として古代の住居の復原を試みた。講演会では、1. 胡桃館遺跡(秋田県)、2. 古照遺跡(愛媛県) 3. 不動堂遺跡(富山県)を中心にとりあげ、1では地上1m余も残存する部材から平安時代の板校倉住居を、2では堰としての材から建築部材のみを取り出し弥生時代の高床建物を、3では巨大な縄文時代の堅穴住居について、それぞれの復原過程をのべ復原図や復原模型を示した。さらに、今までの同種の復原結果と比較検討し、工法的に鮮明になった部分についても言及した。

なお、個々の成果については、それぞれの発掘報告書で詳述している。
(細見啓三)

海住山寺本堂壁画について 現在海住山寺本堂の須弥壇両側に対面して置かれている十一面観音来迎図と補陀落山浄土図の両板絵は、文明5年絵師加賀守の製作になることがほぼ確認できる。絵師加賀守については若干の問題を提起した。この両板絵は同形同大で、来迎壁か衝立屏風の表裏であったと考えられる。来迎図は聖衆を伴って往生僧のもとへ大海原を渡る対角線構図をなしており、南都系の独尊来迎図と異なり、むしろ阿弥陀廿五菩薩来迎図と近似している。一方浄土図は往生者達が登る山の頂に楼閣浄土を描き、むしろ春日曼荼羅などの垂迹曼荼羅と通ずる。このように複雑な絵画史的系譜から成立した両板絵は室町時代の観音信仰の所産としての特色を備えているといえよう。
(百橋明穂)

韓甕の実用と祭祀 甕形土器は、6世紀代に移入され、はりつけ底式・一連底式と仮称する2つの系統をもった。両系統の甕は、製作手法を異にするのみならず、組合せになる釜の形態や甕の有無にも変化がある。一連底式の甕については、分布が畿内とその周辺に限られ、ミニチュア製品がみとめられない。はりつけ底式甕の編年の特色は、底の形態によくあらわされる。甕形土器は、文献にいうところの韓甕にあたり、祭にさいして飯・酒・餅などを調製するのに用い、常食の調理とは別の場所で使用された。その祭は、神祭を主としながらも、奈良時代においてすでに仏教的供養や儒教の祭にまで応用されている。当初における韓甕の日本への定着は、「忌火」の観念とのかかわりによるものらしい。
(稲田孝司)